

東京低地における縄文海進以降の地形の変遷

久 保 純 子

1. はじめに——問題の所在と研究の目的
2. 東京低地の微地形分布
3. 東京低地の遺跡分布と地形
4. 歴史時代の東京低地の地形
5. 考察——地形の変遷
6. まとめと今後の課題

1. はじめに——問題の所在と研究の目的

1) 東京低地の地形の変遷と問題点

最終氷期以降の地形の変遷，あるいは古地理の復原に関する研究は，第四紀学の進展に伴い，各地で盛んに行なわれるようになった。

日本の臨海沖積平野の多くは，最終氷期以降の海水準変化と河川の沖積作用の影響下に形成され，最近数千年間最もアクティブな地形変化の場であったところである。そして人類がその活動・生産の場を沖積平野に拡大したことは，この環境の変化と密接に関連している。

しかし東京低地¹⁾では，縄文海進最盛期以降の地形の復原，特に沖積低地に人類が居住するようになった弥生時代以降の地形を正面からとりあげた研究はほとんどない。縄文時代以降は，むしろ考古学・歴史学からのアプローチがすすんでいるのが現状である。

文献史料のあらわれる歴史時代以降では，史料に記された地名の対比さえできないものが多い。その理由の一つとして，歴史時代の地形が

現在とは異なり，しかもその復原がなされていないことがあげられよう。

さらに，江戸が日本の政治的中心となった近世以降は，河川の改変，低湿地や海浜部の干拓・埋立などの地形の大規模な人工改変が行なわれてきた。

このように，東京低地の地形環境の変化を正しく評価・表現することは本地域の歴史のみならず，現代の東京を理解するためにも重要な課題といえる。

2) 地形の人工改変

東京低地では近世以降，利根川や荒川の「瀬替え」事業をはじめ，荒川・中川・江戸川各放水路の開さくなど，本地域の河川は流路や水系などが大きく改変されてきた。さらに，低湿地の開発・海浜の埋め立てなどの地形の大規模な人工改変が行なわれてきた。

このような地形改変が東京低地において正しく理解・表現されているとはいいいがたい。人工改変地形を正しく評価することは，歴史時代の地形の復原の上でも必要である。

3) 本研究の目的

以上のように，人工改変を含めた東京低地における地形変化を明らかにすることは，台地上から沖積低地へと生活・生産の場を拡大させて

きた、本地域における人類の挙動を明らかにする上でも重要と思われる。

そこで、本稿ではまず東京低地の微地形分布を明らかにし、これと並行して歴史時代（特に江戸時代以降）の人工改変地形を識別し、改変前の地形を推定することにより、中世の東京低地の地形を復原する。その上で遺跡や歴史史料と地形との関係を考察し、各時代の地形とその変化の解明を試みたい。

2. 東京低地の微地形分布

1) 東京低地の地形分類図

東京低地の地形は、沖積層の研究という面からは非常にくわしく行なわれてきたが、平野の微地形からはほとんど行なわれなかった。東京低地地域の地形分類図じたいが、国土地理院（1982）などの土地条件図を除きほとんど作成されなかった。

土地条件図では現状の地表の条件の表現が主であるため、東京低地はほとんどが「盛土地」となってしまう。本研究では東京低地の考古歴史遺跡と地形の関係と古地理の復原を考察する上で、人工改変を受ける前の東京の「原地形」を示す必要がある。

最近、大矢・春山（1988）の葛飾区周辺地形分類図が作成された。これは海岸線・水路等は現在の状況が示されているが、微地形は1940年頃の旧地形をよく表現している。このため、本図をもとに、米軍撮影の空中写真・旧版地形図などを用いてより広域の地形分類図を作成し、あわせて史料などにより河川改修・埋め立てなどの人工改変地形を抽出し、改変以前の地形分類図を作成することとした。

2) 現在の地形と微高地の分布

東京低地の現在の地形は、盛土地・埋立地、人工的に固定された河川、運河などがほとんどであるが、盛土が行なわれず、比較的古い集落が立地する微高地がところどころに分布する（図1）。

東京低地に分布する微高地には、3種類の系列がみられる。一つは、台地の縁辺にみられるもの、2つめは南流する河川に沿うもの、3つめは台地や河川と独立に東西方向に延びるものである。

台地縁辺のものは段丘崖と平行に、小谷の出口をふさぐように分布する。武蔵野台地ぞいでは赤羽から上野の台地に沿って連続するが、上野台地の突端からは、北東へ三ノ輪まで分岐する微高地がある。駿河台の南にも東京駅をのせる微高地がみられる。下総台地ぞいでは松戸市街や市川市街ののるものがある。

これらは分布の形態や表層の堆積物などから、砂州と考えられる。

南北方向に河川に沿うものには、松戸から下流の江戸川や、中川沿いに発達する自然堤防がある。

東西方向のものは、大宮台地の南側の毛長川などに沿ってみられる。これらは自然堤防とも砂州とも言われ、はっきりしない。

江戸川河口部には江戸川に平行する砂州が数列みられる。

浅草から鳥越にかけて隅田川の右岸に沿って連続する微高地は、自然堤防状ではあるが、かつて待乳山（真土山）とも呼ばれたように砂礫層があり、台地の削り残しについた砂州ではないかと思われる。

大宮台地の見沼、上野の不忍の池、赤坂溜池

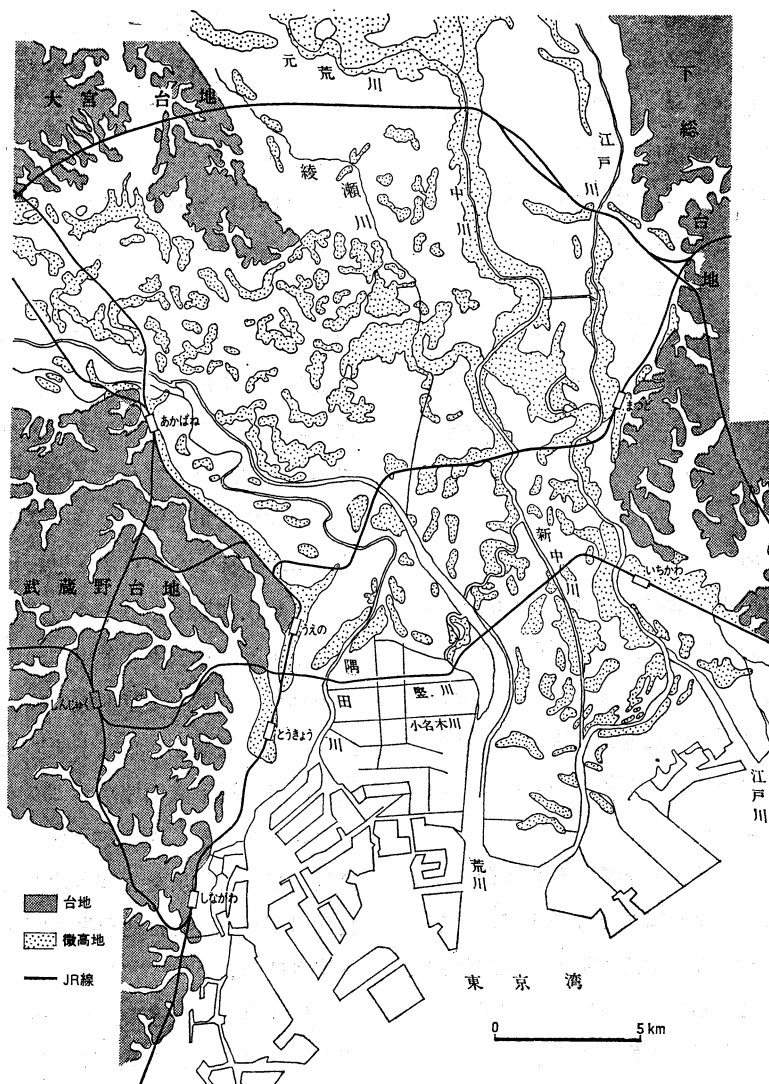


図 1 東京低地の微高地の分布

などは台地を刻む谷の出口が砂州で閉塞されて湿地化したものである。

これらの微高地は、過去の河川や海岸の位置を推定するさい有効である。

大矢・春山(1988)や、隣接する中川流域水害地形分類図(科学技術庁資源局, 1961)によると、東京・埼玉都県境付近でデルタが二つに分けられている。上流側の中川低地では、江戸時代まで二郷半沼、潮止沼など広大な沼沢地があった。これは後背湿地が泥炭地となっていたものである。このように、都県境から上流は自然堤防-後背湿地帯で、下流側はデルタ地域と理解することができる。

3) 人工改変地形

東京低地における地形の改変は、現代においても絶えず行なわれている。近世以降の地形変化は旧版地形図や古地図などにより知ることができる。本節では明治の迅速図(図2)と江戸後期の伊能忠敬の測量図(図版)から、その後の地形変化をもとめる。

迅速図は明治13(1880)年頃に参謀本部により作成され、原図の縮尺は2万分の1で、東京低地全域をカバーする。伊能忠敬の「江戸府内実測図」は文化14(1817)年作成、原縮尺は6千分の1であり、中川が東端である。

迅速図と伊能図では、海岸線や河川などの地形にほとんど変化はない。江戸後期から明治初期の市街地は、隅田川の東1km程度までであった。

河川は東から江戸川、中川、隅田川で、隅田川は荒川の下流であった。海岸線は中川以西は佃島・越中島から江東区中部の地下鉄東西線のあたりにあり、中川の東側(迅速図による)で

は、江戸川の河口部がカスプ状に東京湾に突出していた。

現在の地図にみられる新中川は1963年、荒川・中川・江戸川放水路は、いずれも1930年に完成した。

海岸部の埋立は、伊能忠敬図以来東京湾の沖合へ9kmにもおよんでいる。それ以前にも干拓・埋立は行なわれており、^{たて}堅川以南が江戸時代の干拓・埋立地とされている。しかし、堅川の北、北十軒川までは運河・道路が東西南北に直交し、人工地形と思われる。さらに、^{ひきらね}曳舟付近を北西から南東へ下る旧河道があり、江戸時代に「古川」と呼ばれた(墨田区, 1978)ことから、北十軒川と堅川の間は隅田川が分流して多数の島があった河口部と思われる。

江戸時代初期に、いわゆる「瀬替え」事業を中心とする、利根川・荒川の大規模な改修が行なわれた。これは東京低地のみではなく、中川低地・荒川低地とさらに上流の^{かぞ}加須低地・^{めぬま}妻沼低地、鬼怒川下流低地におよぶ水系の改変であった。すなわち、現在の元荒川から古利根川へ合流していた荒川を大宮台地の西につけ替え、利根川下流は下総台地を掘り割って、銚子へと分流させた。

中川低地では上述のように後背湿地が広大な沼となっていた。また、隅田川の西に^{せんぞく}千束池と呼ばれる湿地があったが、江戸時代に開発され、水田化した。

以上のように、近世以降東京低地の地形は人工的に大きく改変された。

3) 改変前の地形

前節で述べたような人工改変が行なわれる前の東京低地は、利根川と荒川の下流平野であっ

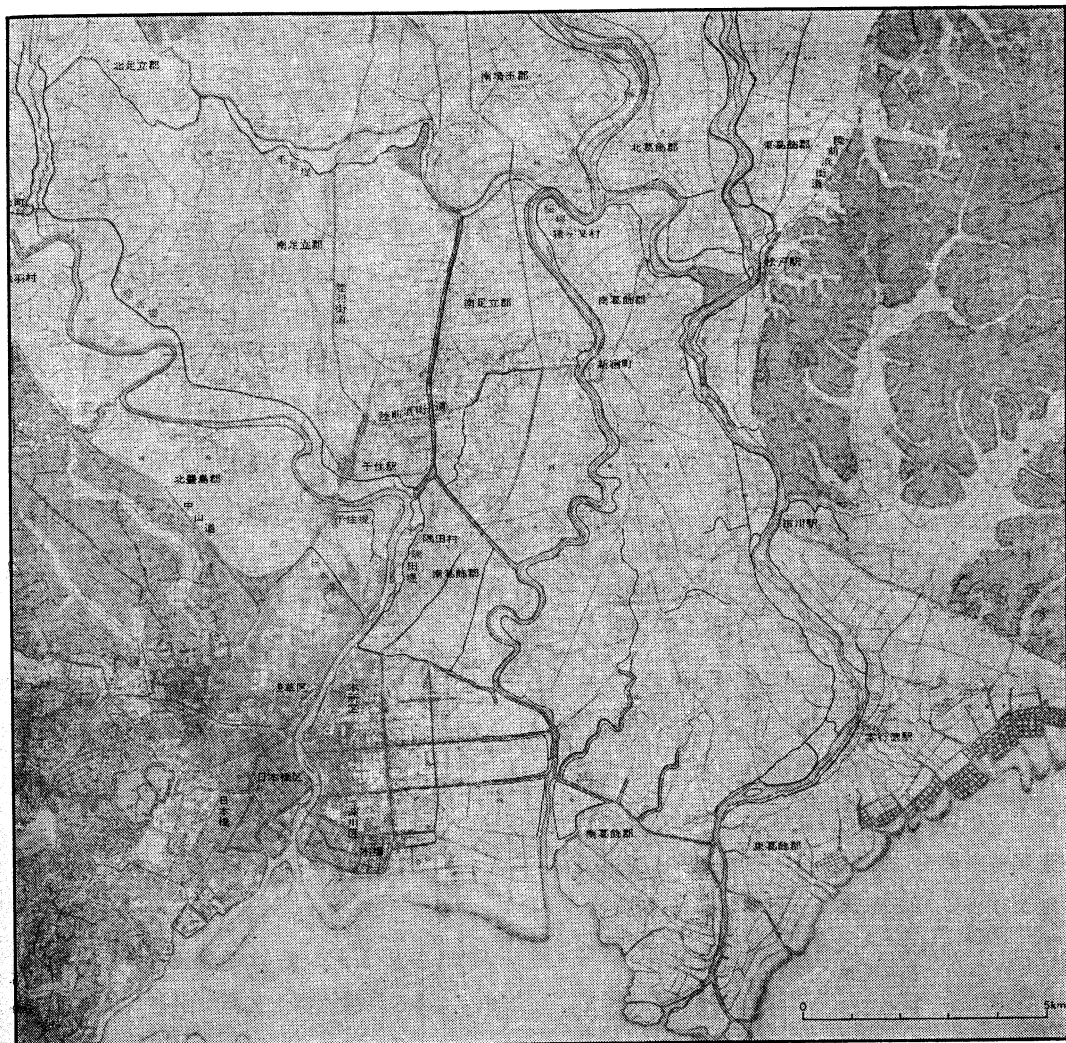


図 2 明治時代の迅速図（アーバンクボタ No. 19 より）

た。中川低地では、古利根川を本流とする利根川が越谷付近で荒川を合わせ、現中川となり、東京・埼玉都県境の猿が又から小合溜を経由し、渡良瀬川下流の太日河（現江戸川）をあわせ、江戸川沿いに東京湾へ下り、浦安付近で河口をなしていた。

猿が又の下流では、現在の中川沿いに南流する細流（古葛西川）があった。また、現在の葛

飾区と足立区の境に古隅田川があった。

隅田川は入間川の下流で、古隅田川が千住付近で合流していた。

隅田川下流部は北十軒川以南でデルタ状に分流し、島がたくさんあった。

以上のような手順で改変地形をそれ以前の地形に復原し、江戸時代以前の中世の地形分類図とした（図3）。

3. 東京低地の遺跡分布と地形

近年、低地遺跡の発見・調査が相次ぎ、遺跡の立地条件などが考察されるようになった。

可児（1962）は東京低地の遺跡の分布を図示し、地盤高や沖積層の層厚との関係を考察しているが、微地形分布との関係は明らかにされなかった。その後も、遺跡の立地と微高地との関わりが考古学者によりくりかえし指摘されている（伊興遺跡調査団，1975；谷口，1989など）。

縄文海進以降地形は絶えず変化し、その間に人類は台地上の生活から低地における稲作・定住へと生活の場を拡大してきた。本節では地理の立場から、各時代の地形環境を、既往の発掘調査等のデータに基づき考察する。

遺跡の分布は便宜上、前節で示した「中世頃」の地形図に示し（図4）、遺跡名や時代を表1に示す。

1) 縄文時代

低地地域では従来、縄文海進で海底にあったため遺跡遺物は発見されないものとされていた。しかし、各地で縄文土器が発見され、一部では貝塚が低地地域で確認されている。

川口市の東光院（江戸袋）貝塚（No. 61）は毛長川右岸の自然堤防（砂州）上に立地し、北区中里貝塚（No. 18）は武蔵野台地の砂崖下の州で、いずれも台地縁辺部である。

その他の地点も微高地上で土器などが発見されたものだが、河川などにより流され二次的に堆積したものもあるかも知れない²⁾。住居跡などの定着定住を示す遺跡遺物は発見されていない。

2) 弥生時代

弥生時代の東京低地の遺跡遺物は前期・中期のものは少なく、不明の点が多い。

後期・晩期になると荒川・毛長川や中川などの微高地に遺跡が集中し、これらは古墳時代のものへと連続する。戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（No. 115）のように、方形周溝墓がまとまって分布する例もある。

江戸川区上小岩遺跡（No. 51）のように靱の圧痕を伴う土器が発見されたところもある。しかし低地では貝塚は発見されていない。

3) 古墳時代

弥生時代後期に引き続き、大規模な集落や古墳が東京低地の微高地に発達した。中でも毛長川（写真1）右岸の足立区伊興遺跡（No. 24）や、江戸川ぞいの葛飾区柴又八幡神社古墳（No. 48，写真2）などが代表的である。

伊興遺跡では土鍾などのほか東海系の土器や鏡を模した土製品が発見され、伊興遺跡調査団（1975）により「水辺の祭祀遺跡」として水上交通の要所とされた。周辺の微高地には古墳が集中していたが（写真3）、ほとんどが破壊され現存しない。

市川市の鬼高遺跡（No. 59）は市川砂州の南方の水田から発見された特殊な遺跡である。木の杭が多数発見され、カキやハマグリなどの純鹹性貝塚を伴い、杭上住居あるいは漁撈に関する施設と考えられている（市川市，1971）。

4. 歴史時代の東京低地の地形

1) 古 代

浅草砂州の浅草寺は、縁起によると推古天皇36（628）年創建と伝えられているが、仏教伝

表 1 東 京 低

(凡例) 番号は図 4 と共通。

2 けたのものは可児 (1962) による。

3 けたのものは資料により新たに追加した。

↑印は時代が不明のもの。

	y.B.P	西暦年	武蔵野台地沿い	隅田川下流	荒川沿い	毛長川沿い
縄文 早期 前期 中期 後期 晩期	10,000	BC 8,000				
	7,000	5,000				(37)花畑町
	5,000	3,000	(18)中里貝塚▽		↓(17)熊野神社	
	4,000	2,000			↓(19)江北橋	(130)草加 10
	3,000	1,000		↓(13)吾嬬神社	↓(110)戸田本町	
	2,300	BC 300		(7)浅草寺	↓(111)南町貝塚▽	(61)東光院貝塚▽ (120)花畑 (24)伊興谷下 (124)草加 4
弥生 前期 中期 後期		BC 100 0 AD 100	↓(20)豊島 5 丁目 ↓(112)土木研	↓亀戸天祖神社	↓(19)江北橋	↓(24)伊興 ↓(35)花畑
		300	(113)志茂		(114)領家六丁 (115)鍛冶谷・新田 口 (116)前谷	(121)東本郷 (129)鳩ヶ谷 23
古墳 前期 中期 後期					(115)鍛冶谷・新田 口 (116)前谷 (117)南原 戸田本村	(122)鳩ヶ谷三和 (124~5)草加 4, 5 (129~30) // 9, 10 (132~3) // 12, 13 (136) // 16 (34)舍人水川社● (35)花畑 ↓伊興古墳群
		400		↓(8)浅草寺● ↓(10)待乳山● ↓(12)鳥越神社●	(117)南原	
		500	(18)中里貝塚▼		(117)南原	(125)草加とんぼ
奈良~平安 鎌倉			↓(番外 6) 上野根岸▼	↓(7)浅草寺 ↓(12)鳥越貝塚▼	(117)南原	(125~9)草加 5~9 (131~2) // 11, 12 (134~36) // 14~16 伊興経塚

来後 76 年で東国の隅田川で漁師が仏像を引き上げたことになる。しかし、境内の出土品により奈良時代には寺院が成立していたことは確かである。

考古資料と比べると、歴史史料は場所の比定ができないものが多い。

宝亀 2~11 (771~780) 年頃編纂された万葉集には、東国の歌も数多く収められている。

「鳩鳥 (におどり) の葛飾早稲をにえすとも
その愛しきを外に立てめやも (14 巻 3386)」

三郷市早稲田の丹後神社にはこの「葛飾早稲」の歌碑があるが、江戸川対岸の下総台地に位置する流山市三輪野山の茂侶神社は式内社といわれ、この境内にも同上の歌碑がある (白石, 1987; 久保, 印刷中)。

「小菅ろの浦吹く風の何どすすか愛しき児ろ

地 の 遺 跡

▽縄文貝塚

●古墳

▼土師器以降の貝塚

中川沿い	中川と江戸川の間	江戸川沿い	下総台地の砂州
(140)彦江	(57)新中川	(161)田中新田	
(40)南蔵院 (43)水元飯塚 (44)青戸御殿山 (141)西袋 (142)東越谷	↓(54)春江椿	(51)上小岩 (53)勢増山	(162)日出学園
(38)大谷田 (40)南蔵院● (42)立石● (143)大成 ↑(149)三郷 (153)鬼塚● (44)葛西城	(56)香取神社 (45) (46)新宿● (47) (48)柴又八幡● (49)〃浄水場 (50)半田稲荷三ツ池	(51)上小岩	(59)鬼高▼
(149)三郷本郷			
(144~148)中川沿 (150~152)〃 (44)葛西城	(52)本一色▼ (154)松江▼ (56)香取神社五分一▼		

文 献

足立区(1967)
 〃(1981)
 荒川区(1989)
 市川市(1971)
 江戸川区(1976)
 柿沼(1987)
 可児(1962)
 川口市(1986, 1988)
 北区(1971)
 墨田区(1987)
 草加市(1988)
 草加・八潮遺跡確認調査団(1983)
 台東区(1966)
 高橋(1982)
 戸田市(1981)
 三郷市(1987, 88)
 八潮市(1986)
 葛飾区教育委員会資料

を思ひ過ごさむ(14巻3564)」

加茂真淵は「万葉考」に葛飾の小菅と指摘し、伊興遺跡調査団(1975)では「浦」を入江と解釈し、葛飾区小菅付近まで海が入っていたとした。

「葛飾の真間の浦みを漕ぐ舟の舟人さわぐ浪立つらしも(高橋虫麻呂)」

「葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈りけ

む手児名し思ほゆ(山部赤人)」

真間の入江は市川砂州の北側の低地で、ラグーンがあったとされるところである(写真4)。手児名という娘がラグーンで入水自殺して有名になったらしい。

正倉院文書の「養老5年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」には、甲和、仲村、島俣の里の戸籍が記載されている。甲和は江戸川区小岩、島俣は葛

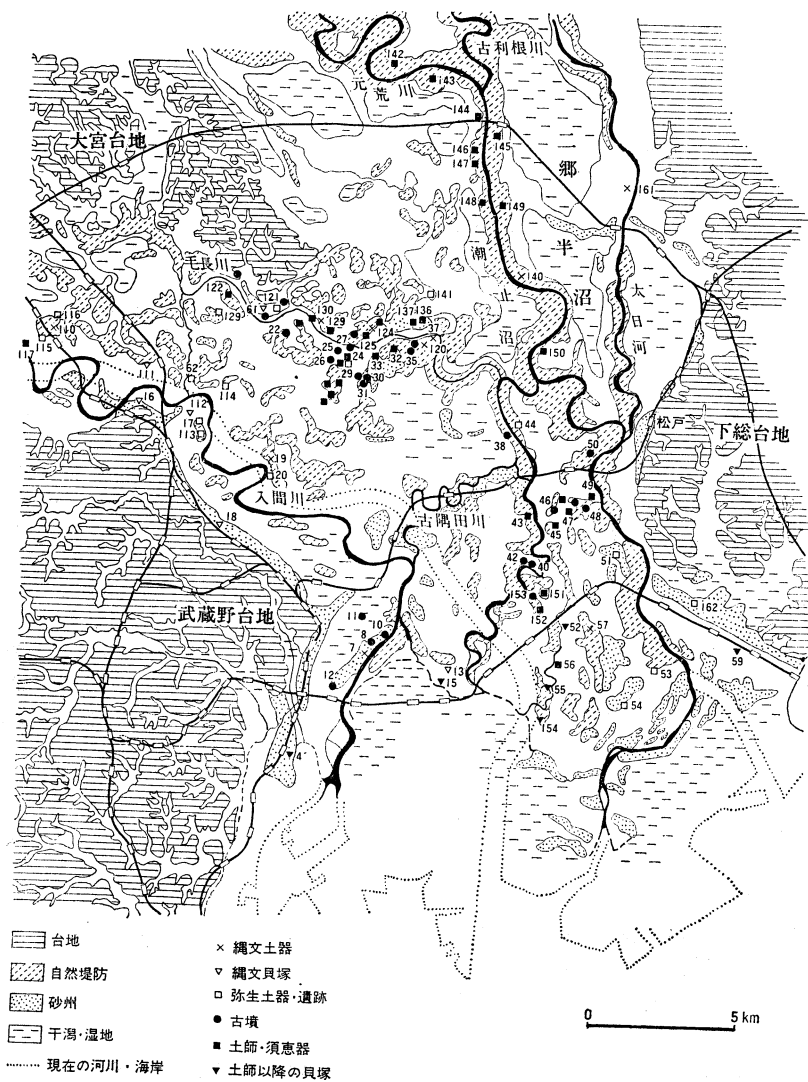


図 4 東京低地の遺跡の分布

飾区柴又に比定されている³⁾。小岩は砂州、柴又は江戸川の自然堤防にあり、いずれも古墳時代の遺跡がある。葛飾区や江戸川区は下総国に属していた。

神護景雲2(768)年、東海道巡察使の紀広名(きのひろな)は、武蔵国の乗漕(のりぬま)、豊島、下総国の井上(いのかみ)、浮島、河曲(かわわ)各駅の交通量が多いので、街道の格上げを提言した。これを受けて宝亀2(771)年、武蔵国が東山道から東海道の配置替えとなった(続日本紀、太政官奏)。古東海道は武蔵府中から上記5駅を通るとする説と、中世の鎌倉街道沿いとする説とがあり、定説をみない(木下、1989)。

承和2(835)年の太政官符では、武蔵下総両国等堺住田河や下総国太日河の渡船の数を増やしたことが記されている。これにより、9世紀頃も隅田川が武蔵下総国境であり、おそらく利根川本流であったと思われる。

2) 中世

伊勢物語(延喜13, 913年頃)には武蔵下総国境の住田河で、有名な「都鳥」の一節がある。都鳥は河口部に生息するユリカモメのことである。

更級日記(寛仁4, 1020年)にも住田川の渡しがあるが、多摩川の渡しと混同している(吉田, 1903)。

源頼朝が東国で挙兵し、治承4(1180)年隅田川を渡った、とある(吾妻鏡)。渡河地点は諸説あるが、現在の台東区橋場付近とされている(鈴木, 1975)。そして浅草の砂州からもう一度「長井の渡し」で水の輪(三ノ輪)を經由し、王子の台地に達した。すなわち、浅草の砂

州と武蔵野台地の間に舟で渡らなければならない水域があったことになる。これは後述する千束池のつづきと思われる。

中世の利根川は埼玉県中部でも隅田川と呼ばれ、古隅田川の名が残っている。古隅田川の名は岩槻から春日部へのコースと、現在の葛飾・足立区境のものの2箇所にみられ、いずれも武蔵・下総国境をなしていた。隅田川下流部は浅草付近より牛島をはさんで南西へ下る現流路と、向島から南南東へ向かう「古川」に分かれ、北十間川付近がほぼ海岸線となっていた。

長禄元(1457)年、太田道灌が江戸城を築いた。当時は日比谷の入江と隅田川河口の間に「江戸前島」があり、その東側が江戸湊であった(鈴木, 1975)。長禄江戸図には牛込の東の池、不忍池とその東方にも大きな池(千束池もしくは姫が池)が描かれている。この千束池は天正18(1590)年頃埋め立てられた(小森, 1978)。

3) 近世以降

a. 河川改修

江戸時代初期に、いわゆる「利根川東遷」と呼ばれる、利根川・荒川の大規模な改修が行われた。これは東京低地のみではなく、中川低地・荒川低地とさらに上流の加須低地・妻沼低地におよぶ水系の改変であった(図5)。

いわゆる「利根東遷事業」のプロセスは以下のようにすすめられたとされる。

文禄3(1594)年: 会ノ川を廃し、本流を浅間川〜古利根川へ移し、派川を太日川へ分流

元和7(1621)年: 新川通をひらき渡良瀬川に合流させ、これを利根本流とする

寛永18(1641)年: 権現堂川、江戸川の開さくにより庄内古川〜江戸川に流す

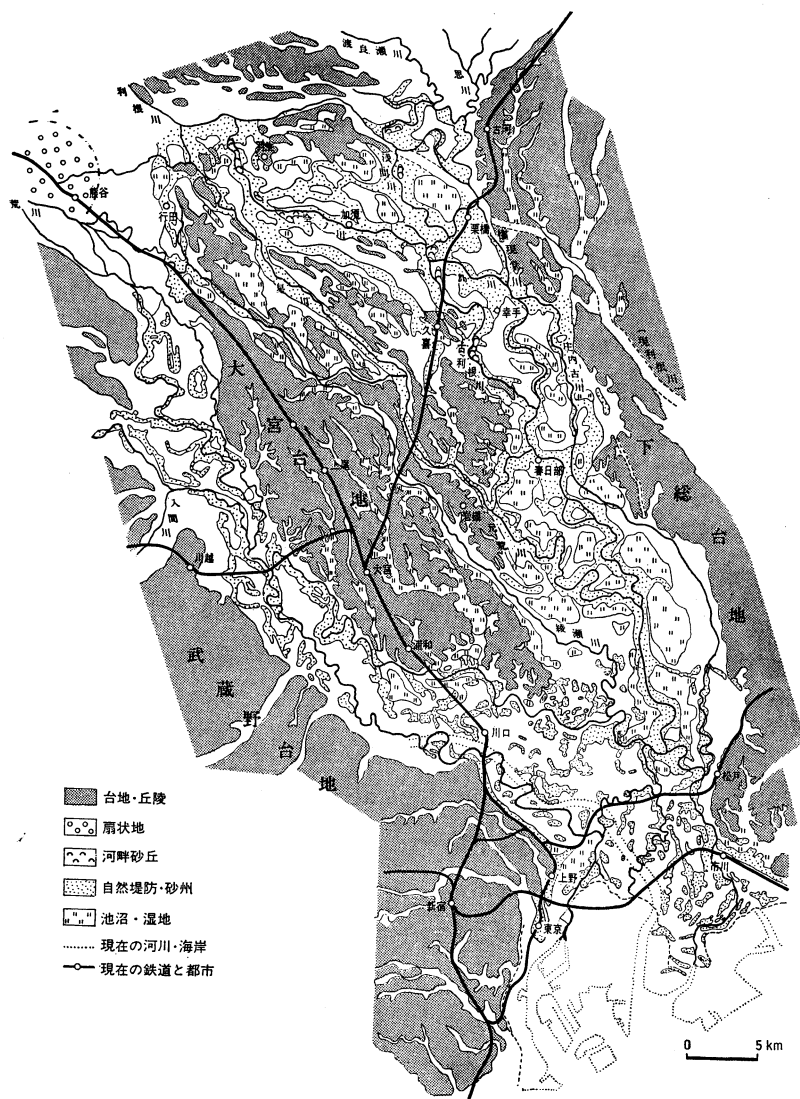


図 5 利根川・荒川の瀬替と旧河道

承応3（1654）年：赤堀川を開さくし、利根川を銚子へつなげる

これらの事業に対し、小出（1975）、大熊（1981）、宮村（1985）などは、いわゆる利根東遷は舟運のための低水工事が主眼で、江戸幕府による洪水防御や新田開発、あるいは伊達藩への防備のための計画的な事業ではなかったことを指摘している。

これに対し関東農政局利根川水系農業水利調査事務所（1987）は、従来どおり江戸幕府による北方警護・流域開発が主目的であると述べている。

いっぽう荒川は寛永6（1629）年、熊谷の扇状地から南東へ下っていた本流を和田吉野川經由で南流させ、大宮台地の西で入間川と合流させた。この理由も西川材の木材輸送のため、など諸説ある。

b. 海浜の埋立・干拓

家康は入府後いち早く、行徳の塩を江戸に運ぶ目的で小名木川（^{おなぎ}運河）を開さくし、その後堅川、大横川、横十間川などの水路網が整備されるとともに干拓が進められた。

隅田川の河口部左岸は近世以降最も埋め立てがすすんだ地域である。大矢・春山（1988）などにより埋め立ての年代を示す（図6）。

c. 低湿地の開発

江戸時代以降、中川流域に分布していた広大な池沼が開発され耕地化された。池沼の分布は科学技術庁資源局（1961）によると、地形分類図の「泥炭地」に一致する。これらの池沼は排水路（堀、落し）がつくられ、干拓された。

5. 考察——地形の変遷

1) 縄文海進とその海退

東京周辺では東木（1926）の貝塚分布による「石器時代」の海岸線の復原をはじめとして、酒詰（1942）、江坂（1971）などにより各時代の貝塚分布が示され、完新世の海進にともなう地形変化が描かれている。

さらに最近では花粉や珪藻などの微化石の分析により、詳細な環境変化の追跡が遠藤ほか（1987）、安藤ほか（1987）、小杉（1989）などによって行なわれている。

縄文時代は長期間にわたること、海進と海退の時代であったことなどから、さらに詳細な環境変化の復原が必要である。特に、早期から前期にかけては海水準が現在より低かったので、遺跡遺物が埋没している可能性がある。また、後述する「弥生海退」との関連において、その後どこまで海岸線が後退したか知る必要があらう。

菊地（1981）や遠藤ほか（1987）によれば、古利根川が西の入間川の低地から東の中川低地へ河道を移したのが約4,500～1,500年前であり、それ以前は利根川は大宮台地の西側を流れていた。古毛長川の上流は入間川低地を流れていた時代の古利根川や古荒川と考えられる。平井（1983）も加須低地の地形の研究より、約3,000年前に利根川本流が加須低地へ流路を移したとしている。

2) 弥生時代の海岸線

濃尾平野や狩野川の沖積平野では、弥生時代の遺跡に溝状の低まりが確認され、井関（1983）により「小海退」が推定されている。

東京低地においては弥生前・中期の遺跡が発見されておらず、本地域の「弥生海退」については確認されていないが、今後明らかにされ

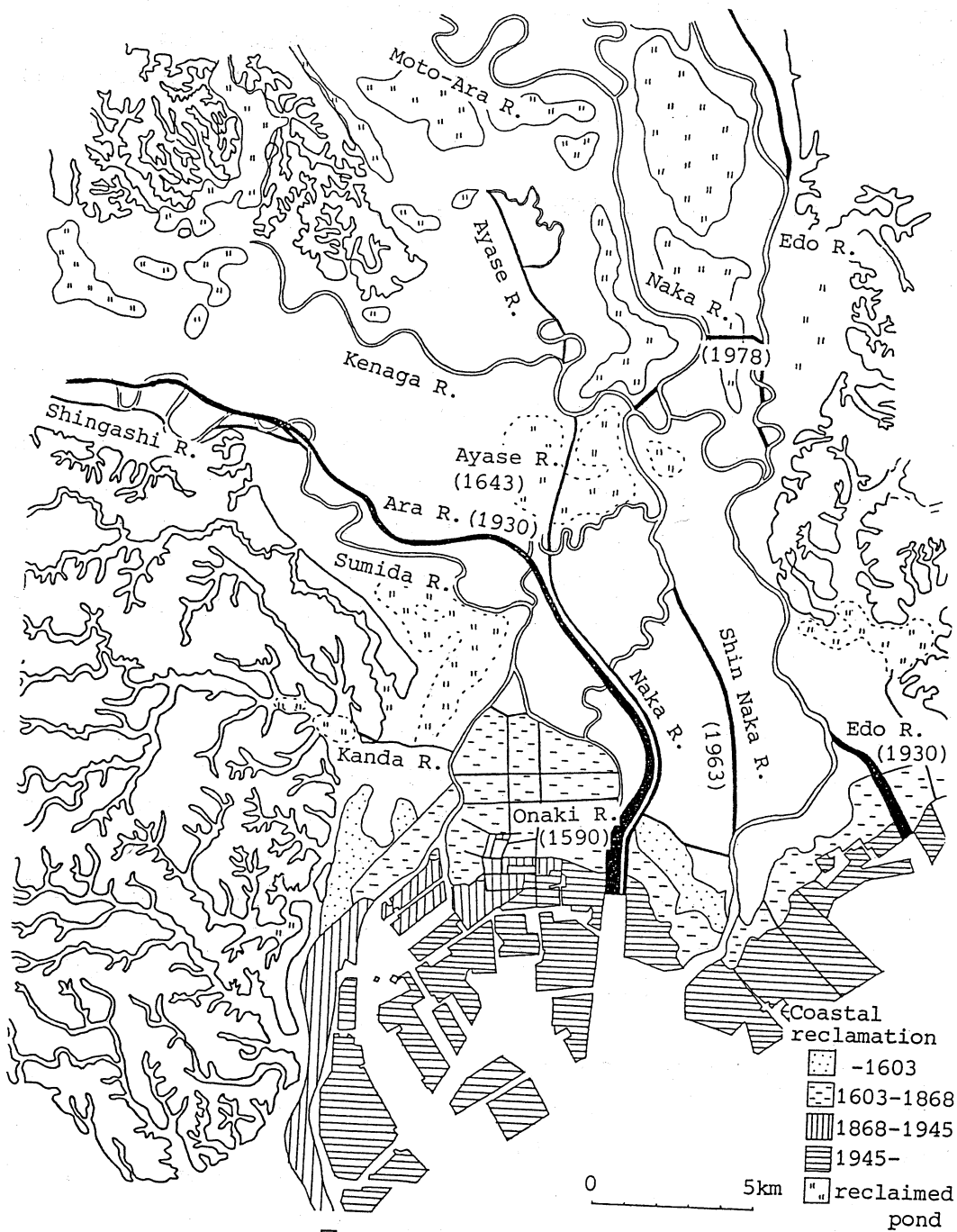


図 6 埋立地・改変地の分布と年代

るべき問題である。

3) 古墳時代の海岸線と河川

弥生末期から古墳時代にかけて、低地遺跡は急激に増加する。遺跡の分布は、毛長川沿いと中川と江戸川の周辺の微高地に特に多く、これらの地域は相対的に早く陸化したとされている。

足立区伊興遺跡では、毛長川付近まで海が入っていたとして水辺の半農半漁の生活が推定されてきた。その後、足立区伊興遺跡調査会・足立区教育委員会（1988）の珪藻分析により、古墳時代中期以前は汽水域であったが、その後離水して遺跡が立地するようになったことが導かれた。

江戸川区上小岩遺跡の珪藻分析（東京都教育委員会、1987）によれば、古墳時代の層準から汽水・海成種が検出された。

葛飾区葛西城址遺跡（No. 44）では、古墳時代の地層は黒色ないし黒褐色粘土で、花粉分析により水生植物のガマ、ミクリ、オモダカ、ミズアオイ、フサモ、ヒシ（いずれも属）などが検出され、 ^{14}C 年代は $1,920 \pm 120 \text{ y.B.P.}$ （Gak-13403）が得られた（葛西城址調査会、1987）。また、付近の鬼塚遺跡（No. 153）での珪藻分析では、古墳時代後期に海の影響がみられたとのことである（葛飾区教育委員会による）。

市川市鬼高遺跡は市川砂州の南側の低地であり、水上施設と考えられるので、古墳時代に市川砂州の南側に海岸があったと推定される。

古墳時代の東京低地はいわゆる黒色粘土の堆積する低湿な環境が復原されることが多く、海進により内陸側が湿地化したのではなかろうか。さらにデータを集め、検討したい。

弥生時代末期以降の遺跡が多数分布する毛長川には、大規模な自然堤防（あるいは砂州）が発達する。下流側はさらに^{がけ}坊川・小合溜へと連続する。これらの微高地が自然堤防とすると、その蛇行波長は古利根川に匹敵する大河となる。遠藤ほか（1987）によれば、毛長川は2,000y.B.P.以降沼沢地化したとのことなので、ここを大河が流れたのはそれ以前のことであろう。

毛長川の上流側に自然堤防を追跡すると、大宮台地の南縁に沿って川越東方に達し、さらに熊谷扇状地まで連続するように見える。この部分を荒川が流れたという歴史史料は確認されていないが、荒川が扇状地を形成しているので南側に流下した時期があったことは確かである。

前述のように、4,500~1,500y.B.P.までの利根川と荒川は大宮台地の西を流れたとされるので、毛長川が2,000年前以降沼沢地化したのは、上述の利根川・荒川の中川低地へのシフトによるものであろう。

中川低地が荒川低地に比べ低湿なのは、利根川が移動したばかりで、まだ埋積がじゅうぶんすすんでいないためなのかも知れない。

埼玉平野北部の羽生・加須低地では、古墳時代の遺構や条里遺構が沖積面下に埋没している。これは上述の利根川の河道変化によるが、より本質的には関東造盆地運動による沈降が原因とされている（堀口、1981）。東京低地では地盤沈下分を差し引くと、遺跡はそれほど埋没してはいない。

4) 古代・中世の河川

当時の利根川は武蔵野台地と下総台地との間の東京低地全域に、文字どおり利根川デルタを

形成していたのであろう。その理由としては、従来のように足立・葛飾区境の古隅田川のみを旧利根本流とするには古隅田川の蛇行波長が小さすぎること、太日河（江戸川）は小合溜合流後自然堤防が拡大すること、中川沿いにも自然堤防が発達することなどによる。

古隅田川に沿う微高地に遺跡がまったく発見されないことは注目すべきである。

猿が又付近で河川が収束する理由として、大宮台地の先に毛長川の微高地が東へ伸び、下総台地との間を狭窄していることがあげられるが、この付近の台地の比高が大きく、埋没段丘も発達する（久保，1988）ことから、関東造盆地運動の2つの中心の間の相対的「高まり」部分であることの関係が考えられる。

頼朝の頃の隅田川右岸には水域が広がり、後世まで「千束池」として残されていた。この地域は自然堤防の発達は悪いので、中川流域のような後背湿地ではなく、ラグーンであった可能性がある。

5) 近世以降の人工改変

近世以降、利根川・荒川の瀬替え、海岸の埋立、低湿地の開発などの人工改変が大規模に行なわれるようになった。

自然現象による地形変化としては、天明3（1783）年の浅間山噴火による利根川の河床上昇があげられる。この後始末が明治時代まで続けられたことはよく知られているが、具体的の下流域にどの程度の変化がもたらされたかは明らかにされていない。また、昭和22（1947）年のカスリン台風では、栗橋で利根川右岸が破堤し、洪水流は中川低地を東京湾まで下っている。このように、東京低地は自然状態ではまだ

利根川の下流なのである。

6. まとめと今後の課題

本稿では微地形分布をもとに、考古・歴史資料から地形の変遷をもとめようとした。

縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の分布からは、毛長川沿いと江戸川・中川沿いが相対的に早く陸化したことが推測される。このことは利根川や毛長川（古墳時代以前の利根川・荒川）などの大河川による埋積作用に加え、埋没波食台などの基底地形が関与していることが原因であろう。

珪藻や花粉などの微化石の分析によると、古墳時代の東京低地には水域もしくは湿地が広がったらしく、海進が推測される。中世の史料には海進の名残りと思われる池や湿地があらわされている。

武蔵国と下総国の境界ははじめ古利根川～中川～古隅田川～隅田川であったが、次第に東へ移動し、江戸時代に現在の江戸川となった。

近世以降の河川改修は水系に大きな変化をもたらした。しかし昭和22年のカスリン台風による水害の例で明らかのように、利根川・荒川の2大河川による東京低地の形成は、まだ完了していないのである。

完新世の環境が決してステイブルではなく、変化する環境に適応した人類の生活があったことを考慮しなければならない。

本研究では歴史や考古の分野について、まだ一部の資料しか検討できなかった。また、古地図の収集・解析や、表層地質による検討も今後の課題として残されている。本稿はほとんどが問題提起であり、今後さらに研究をすすめ、各時代の地形環境を解明したい。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、早稲田大学教育学部大矢雅彦教授からはご指導と励ましをいただいた。また、本研究には、1989年度早稲田大学特定課題研究費の一部を使用した。葛飾区教育委員会の橋本直子氏には、研究上の便宜をはかっていただいた。また、大嶋郷検討会の各位からは多くのご教示をいただいた。ここに厚くお礼申し上げます。

小論を大矢雅彦先生に捧げます。そして、早稲田大学教育学部在職中お世話になった各先生方にも厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 本稿における「東京低地」とは、中川低地と荒川低地の合流付近部から下流の沖積低地をさす。
- 2) 墨田区の吾嬬神社で後期加曾利B式の完形の土器が発見されている。吾嬬神社は隅田川の河口部の微高地に立地し、ヤマトタケル伝説や樟の巨木があり、遺跡分布上の南限であるにもかかわらず、その歴史の古さを推定させる。しかし土器は神社裏手の塚から掛け仏とともに出土したというので、後世の人為による移動の疑いがある。
- 3) 養老戸籍の大嶋郷の位置を井関（1983）は江東区大島としているが、江戸時代の埋立地であり、周辺に遺跡も発見されていない。

文 献

- 足立区（1967）：新修足立区史 総記編上巻
 足立区広報課（1981）：改訂版 足立の歴史
 足立区伊興遺跡調査会・足立区教育委員会（1988）：武蔵伊興
 荒川区（1989）：荒川区史 上巻
 安藤一男ほか（1987）：珪藻群集からみた埼玉県荒川低地の古環境の検討 第四紀研究26-2
 伊興遺跡調査団（1975）：武蔵伊興遺跡
 井関弘太郎（1983）：沖積平野 東大出版会
 市川市（1971）：市川市史第1巻 原始・古代
 江坂輝弥（1971）：遺跡の分布からみた海岸線の変化 海洋科学3-9
 江戸川区（1976）：江戸川区史 第1巻
 遠藤邦彦ほか（1987）：草加市周辺の縄文海進期後の沖積層序と古環境 日本大学文理学部自然科学研究所紀要 第22号
 大熊 孝（1981）：利根川治水の変遷と水害 東大出版会
 大矢雅彦・春山成子（1988）：葛飾区周辺水害地形分類図 大矢雅彦編「水とかつしか」専門調査報

- 告書 付図 葛飾区教育委員会
 貝塚爽平（1979）：東京の自然史（増補第2版）紀伊國屋書店
 科学技術庁資源局（1961）：中川流域低湿地の地形分類と土地利用 科学技術庁資源局資料第40号
 柿沼幹夫（1987）：低地上の遺跡について 鳩ヶ谷市史調査年報 第7集
 籠瀬良明（1981）：谷地田・台端・自然堤防 アーバンクボタ No. 19
 葛西城址調査会（1987）：葛西城址 葛飾区青戸7丁目14番地点発掘調査報告書
 可児弘明（1962）：東京東部における低地帯と集落の発達（上・下） 考古学雑誌47-1, 2
 川口市（1986）：川口市史 考古編
 川口市（1988）：川口市史 通史編 上巻
 関東農政局利根川水系農業水利調査事務所編（1987）：利根川水系農業水利誌
 菊地隆男（1981）：先史時代の利根川水系とその変遷 アーバンクボタ No. 19
 北区（1971）：新修北区史
 木下 良（1989）：上野・武蔵両国における初期東山道駅路について 日本地理学会予稿集36
 久保純子（1988）：葛飾区の沖積層と埋没地形 大矢雅彦編「水とかつしか」専門調査報告書 葛飾区教育委員会
 久保純子（印刷中）：歴史時代の三郷市周辺の地形 三郷市史研究 第2号
 小出 博（1975）：利根川と淀川 中公新書
 国土地理院（1982）：土地条件調査報告書（東京地区）
 小杉正人（1989）：完新世における東京湾の海岸線の変遷 地理学評論62-5
 小森隆吉（1978）：台東区の歴史 名著出版
 酒詰仲男（1942）：南関東石器時代貝塚の貝類相と土器形式との関係について 人類学雑誌57-6
 白石敏夫（1987）：二郷半領開拓史 みさと郷土史研究会
 鈴木理生（1975）：江戸と江戸城 家康入城まで 新人物往来社
 鈴木理生（1988）：都市のジャーナリズム 江戸の都市計画 三省堂
 墨田区（1978）：墨田区史 前史
 草加市（1988）：草加市史 自然・考古編
 草加・八潮遺跡確認調査団（1983）：中川低地遺跡確認調査報告書
 台東区（1966）：台東区史 沿革編
 高橋一夫（1982）：草加の遺跡(1)——毛長川流域を中心として——草加市史研究 第2号

- 谷口 榮 (1989): 東京低地の中世遺跡 文化財の
保護 第21号
- 東木竜七 (1926): 貝塚分布の地形学的考察 人類
学雑誌41
- 東京都教育委員会 (1987): 江戸川区上小岩遺跡
東京都埋蔵文化財調査報告第14集
- 戸田市 (1981): 戸田市史 史料編 原始・古代・
中世
- 内藤 昌 (1965): 江戸と江戸城 鹿島出版会
- 平井幸弘 (1983): 関東平野中央部における沖積低
地の地形発達 地理学評論56-10
- 堀口萬吉 (1981): 関東平野中央部における歴史時
代の沈降運動と低地の形成 アーバンクボタ No.
19
- 三郷市 (1987, 1988): 市史のさんぽ道 8, 14 広
報みさと
- 宮村 忠 (1985): 水害 治水と水防の知恵 中公
新書
- 八潮市 (1986): 八潮市史 自然編
- 吉田東伍 (1903): 増補 大日本地名辞書 坂東
富山房